「地域の遺産」守り抜くための農泊

＝埼玉県加須市の「野菊の宿」＝

東京の都心部から北へ車で約1時間。埼玉県加須市での農泊は、都会の喧噪（けんそう）から離れ、「程よい田舎」を楽しめる。

「何もないのが、うちの魅力なんですよ。静かに自分の空間、時間を過ごすことができます」。そう語るのは、加須市にある農泊施設「野菊の宿」を運営する株式会社誠農社の藤田誠二代表。「地域の遺産」である古民家を守り抜くための農泊を目指している。　（さいたま支局・奥村　杏）

築114年の古民家を改修した「野菊の宿」

◇築114年の古民家を再生

誠農社は2011年に設立。1910（明治43）年に建築された古民家の母屋をリフォームした「野菊の宿」のほか、1922（大正11）年建築の1棟貸し切りタイプの「離れ別邸」を運営している。農泊に取り組むきっかけは、不動産会社の社長だった藤田さんが母屋の物件情報を目に留めたことだった。

「物件情報を見たとき、日本の将来が危ういなと思った。こんな立派なお屋敷が売りに出されてしまう。今建てようと思っても、建てることができない。こういうことが日本全国で起きているのだろうなと思った。地域の遺産がそうなってしまうのは損失だ。どうにかして再生しようと考えて始めた」と、藤田さんは振り返る。

「この建物に出会ったときはもう全然、人が入れるような状態ではなかった。周囲の木の伐採から始め、内部をリフォームして今の姿が出来上がった」。畳をフローリングに変えるなど、改修は最小限にとどめ、なるべく元の素材を生かすようにした。

そうして誕生した農泊施設は外国人からの人気が高く、宿泊者の約3割を占める。担当者は「外観を見たときと、中に入ったときに『素晴らしい』とおっしゃる方が多い。『日本が好きで、こういう建物を探している。外観がやはり素敵だ』ということで来てくださる」と語る。

晴れた日に正門から真正面に見える富士山、蚊帳をつった部屋、10畳の大部屋での雑魚寝など、日本らしさに惹（ひ）かれて訪れる外国人客が少なくない。今では珍しいとされる昔の当たり前、「古き良き日本」の生活を体験できる点が好評という。宿泊者には季節に合わせ、田植え、ジャガイモや里芋掘り、イチジクの収穫といった農作業の体験サービスも提供している。

◇「豊かな田んぼを守りたい」

同社の農業におけるコンセプトは「豊かな田んぼを守りたい」。このため、無農薬・自然栽培にこだわっている。「日本の環境汚染の原因の一つは、農地で使っている農薬や化学肥料なんですよね」と藤田さん。農業を始めてからそのことに気付き、「人と地球に優しい農業」の実現に汗を流す。

「埼玉の田舎でやっていることをどれだけ日本中に発信できるか分からないけれど、とりあえずはチャレンジしていくというのが今は大切だと思う。地域全体、日本全体がどうやったら良くなっていくのかということを考えながら、これからも農泊をやっていきたい」と笑顔を見せた。